



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099(226)5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



朴 和奎師を司祭に叙階

4人目の韓国籍教区司祭として

教区助祭・フランシスコ朴 和奎(パク・チャンキユ)さんが9月22日(木)鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂での「司祭叙階式」で司祭の聖位に上げられた。式には教区の司祭、修道者、信徒はもとより、韓国からも大勢の信者が「海を渡ってまで夢を実現させた」朴さんの晴れ姿を一目見ようと駆けつけた。



朴和奎新司祭

生として学ぶことになった先は、言葉への配慮もあつて仁川カトリック大学(韓国)の。この時、朴さんは49歳。ここで6年間学び、助祭に上げられた今年の一月には55歳になっていた。こ

の日の朴さんの司祭叙階は、教区における最高齢の司祭叙階式で、韓国籍4人目の司祭誕生となった。郡山司教の「羊の匂いのする羊飼いなって欲しい」とのメッセージが込められた説教後に始まった叙階の儀では、泉浩二神父が受階者を司祭としてふさわしい者として司教に推薦、司教がこれを受け入れる旨を宣言すると聖堂内に大きな拍手が響いた。その後、司教から司祭についての訓話を受けた受階者は、連願後の挨拶と聖別の祈りで司祭の聖位に上げられた。この日のミサにはイ・キ

ヒョン司教(ウイジョンブ教区)をはじめ韓国から駆けつけた100人を超える巡礼団への配慮もあつて、韓国語の通訳、韓国語での祈りと聖歌が組み込まれた。中でも「主の祈り」が韓国語で歌われ、その哀愁漂う歌声が聖堂内に響き渡ると、説教で「韓国と鹿兒島の絆の強まりを実感した。これこそがキリストの兄弟姉妹の姿」と語っていた郡山司教は感激のあまり言葉が詰まらせた。ミサの終わりに、祝賀式があり、教区を代表して郡山司教、司祭団を代表して泉神父、信徒を代表して桜井真さん(ザビエル教会)がそれぞれに「信徒と共に歩む司祭になつて欲しい」と挨拶した。その後、花束や記念品を受け取った新司祭が挨拶に立ち、日本語と韓国語で、400人余りの参列者に叙階の感動と参列へのお礼を述べた。また司祭団退堂後

終身助祭候補に認定 母間の池上利男さん

9月18日(日)、ザビエル教会の夜のミサで、終身助祭候補者認定式が行われ



た。認定を受けたのは、母間小教区のルカ池上利男さん(62歳)。終身助祭は、司祭叙階の前段階の助祭とは異なり、助祭として生涯奉仕することから「終身」という語が加わっている。ミサを司式した郡山司教は説教で、「終身助祭は、司祭館で過ごす司祭よりも信徒に身近な聖職者」と述べ、この奉仕職を望む池上さんに感謝と期待の気持ちを表した。認定式には、母間小教区主任司祭・福崎英雄神父と信徒も駆け付けた。認定式後の挨拶から、池上氏の質朴で温かい人柄が感じられた。

「短信」

には新司祭の祝福が信徒に贈られたほか、家族や聖職者たち、信徒に囲まれた笑顔いっぱいの新司祭との記念撮影があつた。祝賀会は一階ホールで開かれ、この日の喜びを表すようにいつまでも続いた。

▼瀬留小教区で敬老のミサ
瀬留小教区では、9月18日(日)敬老のミサをささげた。ミサを司式したのは大島地区長の永山幸弘神父(聖心教会)。

参列した人生の先輩たちは、記念のカードを受け取り、また信徒代表から「教会の礎を築いてくれてありがとうございます。これからも元気で教会の未来のために働いて欲しい」と感謝の言葉と共に新しい使命を受け取り家路についた。

1961年11月26日、父・朴 炳浩(パク・ビョンホ)さん、母・張淑(チャン・スウク)さんの四男として生まれた朴 和奎さんは、55歳。龍文高校卒業後、1980年にカトリック大学へと進んだが2年後に退学、その後、高麗大学に入学(1984年)、法律を学んだ。高麗大学在学中には2年間の兵役(陸軍特殊部隊)のため学業を中断、卒業したのは1993年だった。

その後は貿易会社で3年、弁護士事務所でも2年、英語学院などで2年と働いた。働きながらも司祭職への夢が消えることなかった朴さんだったが、年齢制限から韓国では司祭への道が開かれず、すでに教区司祭に叙階された鄭 法鐘神父(吉野教会)、宋 診旭神父(鹿屋教会)、朴 鎮亮神父(始良教会)らとともに鹿兒島の門を叩き、2009年に教区神学生として受け入れられた。教区神学



郡山司教から接手を受ける

闘病生活を終え天国へ凱旋

レデンプートル会の山口重義神父帰天

2011年2月に倒れ、長年、闘病生活を送っていたレデンプートル会谷山修道院のトマスアキナス山口重義神父が8月28日(日)早朝、帰天した。90歳だった。神父の葬儀ミサと告別式は、8月30日(火)午後、谷山教会でしめやかに執り行われ、大勢の信者たちが豪快な一面を持ちながらも優しさに溢れていた神父との別れを惜しんだ。



1926年4月1日佐賀県は馬渡島に生まれた山口神父は、1949年にレデンプートル会に入会し、修道士として名古屋カテキス

タスクールに学んだ。1959年からの約7年は西舞鶴、吹田、網屋の各教会で伝道師として活躍。栄養士学校で学んだこともあり、老人ホームで栄養士を務めたこともあるという。そんな山口神父(当時は修道士)に転機が訪れたのは1968年のこと。会の事情から司祭への道が開かれ、東京カトリック大神学

院へ入学。そして4年後の1972年6月25日、西舞鶴教会で古屋司教から司祭の聖位に上げられた。鹿兒島教区に着任したのは、1982年の4月のこと。川内教会。その翌年には谷山教会主任司祭となった。また1986年から1990年3月まで名古屋のレデンプートル会修学院院長。その後、母間教会、谷山教会、和泊教会で働き、1999年からは長崎教区へ。2002年からは阿久根教会で約10年、宣教師として力を注ぎ、ここで病に倒れることとなった。

午後12時30分から始められた葬儀ミサで説教したレデンプートル会日本管区長・瀬戸高志神父は、山口神父のこれまでの生き方を振り返りながら「山口神父との別れは悲しいことだが、天の国に会員が入ったと乾杯した。彼は病床にあつても、司祭としての召し出しを生き、死を持って証明してくれた。彼の使命は、キリストの、教会の、そして会の使命だった。彼と出会った人たちが、私たちが、彼と同じように使命を生きていくことができるように祈りたい」とメッセージを送った。ミサ後の告別式では、信徒を代表して雨水新二さんが、司祭団を代表して永山幸弘神父が山口神父との思い出を語り、「あなたのことを決して忘れない」とその計り知れない思いやりと友情に感謝し、長い闘病生活を終えた神父に別れを告げた。



諏訪勝郎神学生の「僕の長崎への道」

日本二十六聖人の道を歩いて

(2)

2月19日(金) 京都―大阪:約53km

午前6時30分、河原町教会でミサ。

午前8時30分過ぎ、望洋庵の皆さんに見送られ出発。

しばらくはきのう歩いた道に行く。林立する高級マンションが、やはり嫌味である。ふと昨晩のことを思い出す。青年たちによる聖書研究会。場所柄か、これに集う多くが高学歴と思しき青年たち。一通り青年たちの分かち合いを終えたと、オプザーバーとして参加した西陣教会の信者、四五十代の医師がコメントした。

「これまで信仰を言葉で表わすことのできる者がいなかった。だから信仰が伝わらず、受け継がれることもなかった。しかしきょう、しっかりと自らの言葉で信仰を語る青年たちを見て、やっとそのような時代が来た、世代が育ったと知って嬉しかった」。

いささか違和感を、どこかしら嫌味な臭気を感じたのである。気取った、多分に教養主義的なそれを。たしかに、「初めに言があった」(ヨハ1:1)。「み言葉は歴史において、聖書という言語表現の集積によって継承された。とはいえず、言葉の重要を是認しながらも敢えて言う、信仰は言葉によって伝わるものか。」

祈るお年寄りの後ろ姿を僕は忘れない。あるいは毎朝、風が吹こうが雨が降ろうが、ミサに与る信者の集うまで、お御堂の周囲を掃き清める人の、竹箒の音をいまも忘れない。

かれらはいつも寡黙であった。信仰を表わす言葉など思いも寄らぬ、ただ信ずるところを信ずるままに生活して来たに過ぎぬだろう。これを心に焼き付けたまでである。だがこのように信仰とは、ささやかな日常に、ありふれた生活のなかに垣間見られる尊い姿によって継承されるものではないのか。

東寺では、交番の警察官をつかまえ、記念撮影。若手は胡散臭そうな顔、年配の警官が快く応じてくれた。塔を背景に、花屋のお姉さんに願い、もう一枚。羅城門跡から旧千束道を行く。川岸をひたすら南下。巨大な橋とそこを往來するトラック等の車両を見

る。はるか昔、同じように移動を目的としながら、走行という営為と歩行というそれらに供されるエンジンの違いを思う。

いま歩む僕のエンジンは、その要は心臓だ。これは脳と直結。喜び、悲しみ、高ぶり、痛み等々ともなう。「ここ」を、一方、車両の思議な代物。一方、車両のそれは単なる機械に過ぎぬモーターである。

モーターゼーションを謳歌するのもよい。だがこれに依存しきった現代、僕らは心臓も脳もその働きを疎かにしてはいまいか。モーターの刻むリズムをおのれのそれと錯誤、人間本来のリズムを見失ってはいまいか。

音楽はかつて、心拍をリズムの基調としたと聞く。メトロノームの必要はなかった。こと音楽に限るまい、人間生活のことごとくがそのリズムにあつてぐるりの自然と呼応していた。

手は喰り木木打つ
吾亦紅のくらし朱の実乾きつつ羊朶の複葉うごくは蜥蜴か



やんでみても後の祭り。痛みを堪え歩き続ける(後日、たしかに聖人たちはこの行程を一日で進んだが、馬で運ばれたと文献で知った。巡礼者の多くが二日かけて歩くそう

いつまでもお元気で！ 鴨池教会で敬老者のための集い

鴨池教会では、9月11日(日)のミサの中で一足早い敬老の祝福をいたした。敬老の対象は満75歳以上の方々で、今年には80人を超え、その内、敬老のミサには33人が参列しました。

名前の紹介があり、参加者一人ひとりに神父様から記念品が手渡されました。ミサ後は教会ホールに会場を移し茶話会が開かれ、婦人部手作りの料理を味わいながら語り合うひと時が持たれました。そして来年も元気で会えることを祈念して散会しました。(鴨池教会レポーター)



現代、人間離れたリズムに慣れきって何ら痛痒を覚えぬ不感性こそ、僕らの病根と思われる。全きいのちを、その恵みを十全に生きていないのである。御幸橋を渡る。国道13号線に歩道がない。危険と判断、経路を外れ杖方まで、川縁の道(歩行者・自転車専用道)を行く。

府境を過ぎた頃、足裏に肉刺が。何たる不覚。日に三、四十キロは歩ける身体を、と神学院生活での可能な範囲で準備してきたつもり。心肺機能を高め、持久力をつけ、長時間リュックを負うに足る背筋を意識。だが肉刺はまったく頭になかった。対策を怠ったと悔

文芸

短歌

鹿兒島純心 川上 和
高槻の右近の信仰揺るぎなくカリタスの業世に輝けり

始良教会 川口 節子
マザーテレサの取り次ぎに主こたえ給う二つの奇跡
絶望の自死者の心知り給う十字架上のキリストの愛

国分教会 市来 房枝
マラソンで一位となりしキプチョゲ選手
ゲートに膝付き十字を切りぬ
鴨池教会 前田 儀子
どこまでも真珠色の空ひろがりて風の干

俳句

吉野教会 徳永ノブ子
爽やかにミサ終え帰宅やひとり言
青空市口ザリオと言う名の葡萄買ひ
龍膽を二つに折りて祭壇に

初秋の街薩摩聖者にライト当て
朝日受け光る稲穂や朝のミサ
鉢植えのミニ蓄微育ち気をもらう
滝く人水を与えて涙ぐむ

司教執務室便り

MEアジア会議報告

「ああ、司教さんがやっているあの、何でしたか、イーエム？」
「いえ、それは沖繩の先生が発見したもので、こちらはME、エムイーです。結婚した人たちのための…」
この頃は、そんな長いやり取りをすることもなくなりました。しかし、「じゃあ、私たちが」と腰を上げる夫婦はまれだ。

現在、MEは、韓国やインドネシア、フィリピンやインドを中心に、アジア12か国で活動を展開している。最近、目を引くのが中国での盛況ぶり。そんな中で最も低調なのが我が国日本。それでも毎年開催される代表者会議に欠席したことはない。

そんな日本の代表が、今回のスリランカ会議で次期アジア代表に選出された。他に推薦されたインド代表との一騎打ちの様相を呈したが、なかなか条件を満たすことができないで何度も投票をやり直し、最終的には、あのやり手のインド代表を抑えて、当初は推薦すらも固辞した

日本代表の二人が選出された。会場から、速報を送ったが、家の定日本中の仲間たちが湧きかえった。正直言って、言葉の問題にしてもリーダーシップにしてもインド代表に落ち着くものと思っていたのだが。

これまでも感動したウイークンドの集いは多いが、結婚の秘跡性をこれほど強く感じたことはなかった。世間一般の夫婦との違いに気づかないまま過ぎてきた二人がウイークンドの集いで実感したのは、「二人の出会いの不思議さは神様の選びの不思議さ」という結婚の原体験だった。それ以来大切に生きてきた、神さまの夫婦らしく生きたいという素朴な思いを日々新たにするための祈りと対話。今回のどんでん返しは、そんな新しい生き方を始めた人たちの常識を超えた秘跡的生き方のなせる業だった。

秘跡は常識を超えて働く神様の業。洗礼を受けたみんなの合言葉にしてほしいと思う。きつと、新しい地平が開け、信仰の新しい歩みがきつと始まる。2018年にはMEアジア会議が鹿兒島にやってくる。秘跡を受けた鹿兒島教区のみみなで支えてほしい。



「神はありのままの君たちに期待している」

教皇フランシスコ、閉会ミサでメッセージ

ワールドユースデー・クラクフ大会

2016年ワールドユースデー(WYD II 世界青年の日)の世界大会が7月28日から31日まで、ポーランド南部のクラクフであった。公式日本巡礼団は鹿児島教区郡山健次郎司教を団長とし、同伴者の司祭・修道者のほか、約120人の青年が参加。本大会閉会ミサでは教皇フランシスコによる「神はありのままの君たちに期待している」とのメッセージに励まされるなど、得難い二週間(本大会後のアウシュヴィッツ訪問等を含む)を送った。

WYDは、国際連合が1985年を「国際青年年」(International Youth Year)と定めたことに合わせ、当時の教皇ヨハネ・パウロ2世が受難の主日(枝の主日)にローマに集まるよう青年たちに呼びかけたことに始まる。以後、二、三年に一度、世界各地の持ち回りで開催。大会には、世界各国の若者が一つ

になり、教会の本質であるキリストの受難と復活の神秘を味わうため、世界中から多くの青年が集う。今年もポーランド南部の古都クラクフで開催された。クラクフは、17世紀初頭のワルシャワ遷都まで、ポーランド王国(当時)の首都。旧市街はユネスコ世界遺産に登録され、ポーランド文化の中心地と目される。ゆかりの人物として、地動説を唱えた天文学者コペルニクス、就任前に同地の大同教であったローマ教皇ヨハネ・パウロ2世、映画『大理石の男』で世界的な映画監督アンジェイ・ワイダなどが知られる。

公式日本巡礼団(団長・郡山健次郎司教)には、日本の全三管区から青年約120人が参加。7月23日、各管区あるいは各参加日程に応じて、成田・関西・福岡空港から出発した。24日から26日まで、クラクフの北東約100kmに位置するキエルツェ教区に滞在。同教区では管区ごとに小教区に分かれ、信者宅にホームステイ、各小教区独自のプログラムに参加し交流した。

27日のユース・フェスティバル(前夜祭)の後、28日から31日まで本大会があった。この期間中、日本巡礼団の青年たちは午前、同巡礼団に参加の三司教(高見三明大司教・諏訪榮治郎司教・浜口末男司教)によるカテケージス(アニメーション、分かち合いを含む)とミサに参加。長崎管区の青年たちは29日、大分教区浜口司教によるカテケージスのアニメーションを担当した。

クラクフまでの道程を映像とともに振り返る分かち合いを行い、「平成28年熊本地震」被災地支援ボランティア活動を報告。熊本の惨状を傍目にWYDに参加する葛藤を語った。そして、被災地への思いを込めて、「くまモン体操」。他管区参加者の感動を誘った。

その日の午後、郡山健次郎司教による講話「十字架の道行きについて」。これはその日の夕刻に行われる、フランシスコ教皇を迎えるの十字架の道行きに先立ってのもの。郡山司教は「十字架の道行きの全15留が、教会の本質であるキリストの受難と復活の神秘を表している。WYDの目的もこれを味わうことにある。青年も信心行を大切にしたい」と語った。

本大会では28日夕刻、クラクフ大司教司式による教皇フランシスコ歓迎ミサ(式典)に参列。29日夕刻には、十字架の道行きに参加した。また30日夕刻、「夕べの祈り」を教皇とともにに行い、その晩は会場となったカンポス・ミゼルコルディア(いつくしみの野原)で野宿。世界中から集った数十万の青年たちの間で、寝袋にくるまり一夜を明かした。

31日午前10時、教皇フランシスコ司式によるWYDクラクフ大会閉会ミサが。約250万人が参列。教皇は説教で「神はありのままの君たちに期待している」と青年たちにメッセージ。「主にとって大切なのは、君たち自身。主の目には、君たちは貴く、君たちの価値は計り知れない」と励ました。

閉会ミサ後、教皇は次回開催年と開催地を発表。パナマ共和国で行われる。クラクフ大会に参加した長崎管区の牧野美咲さん(福岡教区・光丘教会)は、「今回のWYDに参加して、自分のこと、日本のこと、神様のことを前よりもずっと好きになった」と充実感あふれる笑み。「今年、鹿児島教区から一般青年の参加がなくて残念。2019年のパナマでは一緒に感動を分かち合いたい」と話した。



講話する郡山司教

26日午後、全三管区がクラクフで合流。善き牧者教会での結団式の後、グループに分かれ同教会(小教区)の信者宅にホームステイした。

「マイバイブルII」が、フランシスコ会聖書研究所訳聖書(2011年)の本文を用いた改訂版として、9月に出版されました。カトリック教会は今、いつくしみの特別聖年を祝っています。各地の指定聖堂への巡礼と共に、聖書を読み、秘跡にあざかり、いつくしみ深い神様の救いの業

本棚 特別聖年に読んで欲しい一冊 マイバイブルII



を知り、その語りかけを聞きながらじっくり味わい分かち合うことが勧められています。この本の出版はわたしたちにとって、本当にタイムリーなできごとです。今、真理と愛、そして本物の生き方を心から求めている多くの人々が聖書を手に取り、読み、味わい、い

のちの言葉によって生きるようになることを心から願っています。この小さな本、「マイバイブルII」は、その言葉の宝石箱は、そのための大きな助けとなるでしょう。「マイバイブルII」の序文より

書籍名 MyBible II (マイバイブルII)

定価 600円(税別)

購入先 女子パウロ会 サ

ンパウロ社 日本キリス

ト教書販売(株) 大手書店

会と催し (10月)

- 1日(土) 司祭のマリア運動・13時・ザビエル教会 年間第27主日
- 2日(日) 大松正弘神父霊名(聖ジェルドル)
- 3日(月) 牧山田一神父叙階記念(1961年)
- 5日(水) デクルス神父命日(1980年)
- 6日(木) 聖体礼拝・カテドラル・6時30分
- 8日(土) いつくしみの集い・ザビエル教会・14時
- 9日(日) 年間第28主日
- 10日(月) 福岡英雄神父叙階記念(1989年)
- 12日(水) アッシュヤー神父霊名(聖マックス)
- 15日(土) 正義と平和協議会・教区本部・15時
- 16日(日) YOCAT種子島・20時
- 18日(火) 年間第29主日
- 18日(火) 聖ルカ福音記者
- 23日(日) 教区巡礼員会・教区本部・19時
- 23日(日) 年間第30主日
- 24日(月) ▼世界宣教の日(献金)
- 24日(月) ▼オリブの会・教区本部・14時
- 28日(金) 大水如安神父命日(1994年)
- 30日(日) 聖シモン・聖ユダ使徒 年間第31主日
- 31日(月) ミタマヤ神父命日(1984年)

祈りの意向

- 【ノベナ】 教区における宣教活動(10日~19日)
- 【祈祷の使徒会】 世界共通・ジャーナリスト
- 宣 教・世界宣教の日
- 日本の教会・祈りによる交わり

+KABAYAN SEKSYON+
Ang Karukhaan ni Kristo
Nagpapayaman sa Atin

Sa pagninilay ni Papa Francisco sa kusang-loob na pagpili ni Kristo na maging mahirap, tinukoy ng Santo Papa: "Nang piliin niyang maging dukha, hindi hinangad ni Hesus ang karukhaan para sa ganang sarili nito ngunit tulad ng sinabi ni San Pablo 'upang sa kanyang pagiging mahirap kayo ay managana.' Hindi ito paraan lamang ng pagsasalita o pantawag-pansin. Bagkus, ito ang buod ng pakikipagkapwa ng Diyos, ang lohika ng pag-ibig, ang lohika ng pagkakatawag-tao at ng krus."

Isinaad ni San Pablo na tayo ay pinalaya ni Kristo hindi sa pamamagitan ng kanyang kayamanan kundi ng kanyang karukhaan. Kaya't itinatanong ni Papa Francisco: "Ano itong karukhaan na sa pamamagitan nito'y pinalaya at pinayaman tayo ni Kristo? Ito ang paraan ng kanyang pagmamahal sa atin, ang kanyang pakikipagkapwa, gaya ng pakikipagkapwa ng Mabuting Samaritano sa lalaking naghihigalo sa tabi ng daan (Lu 10:25)."

"Nang sabihin ni Hesus na pasanin natin ang kanyang 'pamatok na magaan' hinihiling niya na tayo'y pagyamanin ng kanyang 'karukhaan na magpapasagana' at ng kanyang 'kayamanan na karukhaan,' upang makibahagi sa diwa ng pagiging anak at kapatid, upang maging mga anak sa katauhan ng Anak." Bilang pagtatapos, sinabi ni Papa Francisco na "masasabi natin na mayroon lamang isang tunay na uri ng karukhaan: ang hindi pamumuhay bilang mga anak ng Diyos at mga magkakapatid kay Kristo."

Mahirap mauunawan ang mga turong ito ng ating Panginoon Hesus tungkol sa 'karukhaan ang nagpapayaman sa atin'. Ang karukhaan ay hindi lamang nababasa sa tinatawag nating 'material' o 'mga bagay' lamang na wala sa kamay natin, kundi mayroon man tayo ng mga bagay na ito pero hindi nakasentro diyan, bagkus ito'y ating ibinabahagi sa iba, lalung-lalo na iyon mga dukha sa lansangan, walang mga tirahan at yon mga palaboy-laboy. Kung nagagawa natin yon na may puso ni Hesus, nagiging yaman natin yon hindi masyadong kapit sa mga materyal at nabubuhay tayo ng may kababaang-loob at diyan ay nagkakaroon ng kahulugan ang buhay sa karukhaan na nagpapayaman sa atin.

Katesismo sa Taon ng mga Dukha (Fr. Dino Orolfo)

カトリック幼児教育がこれから進む方向

第47回カトリック幼稚園教職員研修会

相良敦子先生の講話を聞いて

7月25日、26日の一泊二日、霧島の国際ホテルで毎年恒例のカトリック幼稚園教職員研修大会が開催された。教区内にあるカトリック幼稚園は21園。今年の大会にはそのうちの18園から143人の職員が参加し学習した。今回は日本のモンテッソーリ教育の第一人者でもある相良敦子先生の「カトリック幼児教育が、これから進む方向」について話を聞くことができ、子どもたち一人ひとりの人格形成に大切な年齢に日々かかわっていることを再確認できた。以下は竹田陽平さん(天城幼稚園)の感想。

竹田 陽平

長年、学校教育に携わり、多くの児童・生徒とかわつてきて考えさせられたことは、子どもたちは実に様々な家庭環境で育っていることである。このことから、常に心がけてきたことは、どの子にも学校・クラスにおいて居場所を提供すること、そのためには、一人ひとりを認め励ます教育がなされなければならぬという思いがあった。

社会では学歴偏重や能力主義が進み、また、グローバルな時代と言われる。今、社会情勢が変化するたびに、教育現場はその都度振り回されているのが現状ではないだろうか。こういった中で、「いじめ・不登校・落ちこぼれ」などの社会問題が起きている。さらには、自己肯定感の持てない子どもが増えてきている。これらの現象

は、小さい頃から周りの人に認められる経験が乏しく、達成感・成就感が持てなかったことなどが要因としてあげられる。

幼児期は人格形成に最も重要な時期であると言われている。哲学者カントは「人間は唯一教育されなければならぬ動物である」と言っている。これを証明

鹿児島カトリック正義と平和協議会 学習会・講演会 2016
 「聖書を発見する」・神は貧しく小さくされた者と共に
 講師：本田哲郎 神父 (フランシスコ会)
 日時：(学習会) 11月18日(金) (定員 20名) 15時~17時
 (講演会) 11月19日(土) (定員 50名) ① 10時~12時 ② 13時~15時
 場所：カトリック鹿児島教区本部・2階会議室
 参加費：自由カンパ
 連絡先：080-1704-8315 山下和実
 本田 哲郎 1942年生まれ。両親は奄美出身。大阪釜ヶ崎にて、日雇い労働者に学びつつ聖書を読み直し、また「釜ヶ崎反失業連絡会」などの活動に取り組んでいる。新共同訳聖書の編集委員



鹿児島教区カトリック幼稚園教職員研修大会

しているのはインドのオオカミに育てられた姉妹であろう。3年前、縁あって幼稚園とかかわるようになり、初めてモンテッソーリ教育と出合った。ここで実感したのは、年齢が低いほど指導も難しいことである。・幼児一人ひとりの個性、自由、自立の三つの要素を重視する教育、子ども中心の教育、幼児の個人差を認めながら、その能力を最大限に引き出そうとする教育、このことを踏まえ、子どもとかかわり実践している教師の姿を見て感心させら

この階層に於いて上位のもの、下位の特性をもっており、これらの間には厳然とした隔絶があり混在はありませぬ。この理解のもとでは、同じ次元に属する人間では人間を救えない、という結論に至ります。つまり、人間という存在を救うのであれば、人間よりも上位にある存在しか人間を救えない、ということ。こうなると、人間を超越するもの、即ち、神が直接人間を救うのであればメシアは必要ない、という結論に導かれます。この、「メ

鈴木神父のやさしい言葉 真の救い主メシア

今回、初めて研修会に参加して、相良先生の具体的な理解も少しは深められたように思う。特に印象深い

シアが人間であれば人間を救えない、神が人間を救うのであればメシアは必要ない、ということが前回お話ししたメシア預言の矛盾なので。当時のキリスト信者たちは、自分たちに突きつけられたこの矛盾を信仰と言語をもって深く考えたことでしょうか。

確かに、出エジプトに於いて葦の海を渡った出来事を思い出してみれば、神様が直接人間を救ってくれたのですから、再びこのような業を現してくるのであればメシアは必要ありません(出エジプト14章)。また、旧約聖書の中では「人間には救う力はない」と明言されています(詩篇14

6・3)。そこで福音記者マタイもルカも「神のようではない」、人間のようではない」といふ存在こそが真の救い主メシアであるという霊感を受けたと考えられます。もし神が人間として生まれるとしたら、普通の人間とはどこかが違うはず。また、人間でなければ人間を産むことはできません。この矛盾の解決こそが処女懐胎の神秘なのです。霊感を受けた福音記者のみが神の子として人間を救うことができる、という結論に至ったのでしよう。だからこそ、イザヤの預言を用いて「パルテノス」に「処女」の意味を読み込んだと考えられます。このことによりイエス様とは「真の神」とあり、「真の人間」と言えるのです。確かに、人間の理性では信仰の

環境を作つてあげることが大切なことを改めて認識した次第です。子どもの琴線をふるわせ、子どもの願いを叶えられる教師でありたいものです。

子どもは興味・関心を持つた者には何度でも繰り返すということ、従って敏感期には環境整備が大切なこと。また提示・提供の仕方もゆつくり見せることで、子どもにはよく理解できると



講話する相良先生

2016 Canossa Youth Day in 九州
 日時：10月29日(土) 10時~ 30日(日) 16時
 会場：「福岡黙想の家」(〒811-4155 福岡県宗像市名残 1056-1) <http://fmokuso.com/>
 講師：暮林 響神父様(神言会)
 対象：青年男女(18歳~35歳)
 参加費：5,000円
 申込先：〒156-0045 東京都世田谷区桜上水2-5-1 カノッサ修道女会
 Tel.03-3329-3364 FAX 03-3302-1297
 E-mail: canoyouth@gmail.com
<https://www.facebook.com/canossajp/>
 申込〆切：10月15日



すべてを理解することはできません。しかし、理性を働かせて信仰を考えることは大切なことです。

1 荻野弘之「古代ギリシアの知恵とことば」日本放送出版協会1997年、134頁、参照。